
恋する爆弾王女

砂那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する爆弾王女

【Zコード】

N4829M

【作者名】

砂那

【あらすじ】

突然王宮に拉致され、訳のわからないままに姫の夫にさせられそうな主人公。ギャル口調の王、世界王者のようなパンチを持つ王妃。そして巨大な魔力を暴発させる姫に、メイド服にアフロの美少女まで現れて？

「いいから事情を説明しろ、事情を！」

国を追われた最強魔導師の、受難の旅が始まる…。

第1話 災難の始まり

その森はまるで長い間、人が足を踏み入れた事がないような状態になっていた。木々が生い茂り、草は生え放題。森の中とはいっても日中も薄暗い。

「なんだこの森は。なんだこんなに荒れてんだ。いばら姫でもいるのか？」

見事な装飾の剣を、まるで芝刈り鎌のように振り回したひとりの青年が、身の丈程にも生えた草を薙ぎ払いながら進んでいく。黒髪に、赤い瞳をしている。

魔術師のように身軽な服装をしているが、剣を持つている所を見ると剣士になのだろうか。

「てか、ここ、地図によると道なんだけだ。森じゃなくて。地図が少し古かったか？ 半額の更にセールで二割引だったからな……」身形は良いが、口と態度は悪そうな青年は、地図を放り出してその場に座り込んだ。

草の匂いが広がる。

「メンドクサイな……。もう帰るか。つて帰る場所はもうないんだつたな。つてかさつきから俺、独り言多すぎ？」

文句を言いながら座り込んだまま、剣を使って周囲の草を薙ぎ払う。無造作に片手で剣を振り回しながら、放り投げた地図を広げる。

「川から北に森を抜けて、街道を行けばいい筈なんだけだ。何処から間違ったんだろ。それとも何か。実はもう国は滅んでて、魔物がいたりしてな。それを倒すのが使命とかだつたりして。あーもー、何もかも面倒だ。なんで俺がこんな事しなきやなんないんだ？ つてさつきからうるせえよっ！」

耳元で何か動物の威嚇する声。

草を払つていった剣をそのまま声がした方向に薙ぎ払うと、何かに当たつた感触がした。

「ん? 何だ?
うさぎ?

足元に少し巨大化したうさぎが転がっていた。

「これが魔物……な訳だした。
食えるんかな。」

と、その時。

「…………」

茂みの中からすばほぼつと複数の人の姿が現れた！

慌てて立ち上がるうとするが、男達はすんすんと迫ってくる。

救世主です！

「これでこの国は救われる！ 森にも入れるし町も破壊されない。」

感激です。感謝です

この國の勇者を今、三富へ連行……

「ラジヤツ」

「で」

気が付けば、そこは半壊した建物の中。どひやうすい。満面の笑みを浮かべた王と、感激した様子の王妃の目の前で。強引に連れてこられた青年は溜息交じりに呟く。

「誰かまともな人間はいないのかつ。事情を説明しろ、事情をつ！」

「おめでとう」「ひつひつ

「だからおめでとうはまつといつつい。誕生日? 僕今日誕生日なのかな? それとも新年か? あけましておめでとうひつことなのか?」

「キミ、こまは夏だよ? 新年はまだ半年も先だ」

「そんなとこだけ冷静に突っ込むな! 気の毒そうに聞ひつけ……」
「ああ、もう疲れる。何なんだ、この国は……」

王が、はつとしたように立ち上がつた。

「だよね。疲れてるよね。すぐに部屋を用意しよう。パーティとか結婚式の日取りはまた明日」

「は? 結婚式? 何の話を……って、人の話少しばかりよ……」
「気が付けば部屋に押し込められ、扉が施錠された。

「ん? 施錠って何だよ。おかしくないか? 施錠されたじやねえよ、詳しい話もっと聞かせろよ。そもそも俺の名前だつてまだ出てきてないぞ。名無しのままこんな仕打ちはねえだろ?」
散々騒いでも、扉の向こうからは何の反応もない。

仕方なく、ベッドの上に座る。

「……俺はこんな所で足止めされる訳にはいかないんだけどな」
ふと、視線を部屋の中に巡らせる。その隅に無造作に置かれていた張り紙。そこに書かれていたのは。

『森に奥地に住み着く凶暴なグリオンを倒した勇者を、姫の夫として迎えよう』

「…まさか、あの凶暴なうきがグリオンだつたりするとか。そんな事ないよな? そんな事ないよな? 一回言ひ直す」

青年の声だけが空しく部屋に響き渡る。

第2話 アフロの美少女、現る

王宮は無残にも崩れ落ちていたが、この部屋だけは頑丈そうな造りだった。

「そつといえぱ」の王宮。なんであんなに崩壊してたんだ？ 一晩寝て起きたら廃墟の中でいたる所に白骨が……なんてオチだつたりしてな」

周囲を見渡すが、変わった様子は見えなかつた。一応王宮で、豪奢な造りの部屋である。他にアイテムも、ヒント機能もないようだ。

「……翌朝じやないとイベントが発動しないって場合もあるしな。それにこんな訳わからん状況よりは廃墟で白骨の方がまだマシだ。
……寝よう」

うん、そつじよつ、それがいいと弦きながら。

俗に言う現実逃避といつものである。彼は綺麗に整えられた寝台へと入り眼を閉じた。

(翌朝になればきっと体力気力共にマックスで、ついでに毒麻痺からも回復する。……多分)

その、翌朝。

ばまつーーーーーん！

突然、王宮中に鳴り響くのは、爆発音。

「な、な、なんだ？」

寝台から飛び起きる。振動が建物全体を揺るがしていた。青年は頭を軽く振つて立ち上がるうとするが、続く振動の為にそれは困難だつた。

「なんだ、夢じゃなかつたのか。じゃなくて。急にイベント勃発か？ フラグ立つちゃつたのか？」

そう言い続ける間にも、爆発音は続く。これは只事ではないのだろう。彼はようやく真顔になると、瞳を閉じた。ふわり、と黒髪が風もないのに靡き、赤い瞳が光る。

「魔力……かなり大きい魔力だな。やっぱり魔物か？ メンドクサイなあ。まあ、でも」

笑みを浮かべる。

それは、自分の力に自信を持つ者しか浮かべる事の出来ない笑みだつた。

「俺の相手じゃないな。力任せに魔力を放つだけが魔法じゃないぜ？ ……って！ 扉開かねえぞ、おい。まだ施錠したままかよ。こんだけ言つといて部屋から出れないのかよ！」

そうしている間にも爆発音は続いている。

「あー、もう。仕方ねえな……」

どうせ破壊されているんだ、今更扉のひとつくらい、今まで受けた理不尽な仕打ちを考えると安いくらいだらう。そう勝手な判断をして、扉の前に腕を突き出す。

「扉の前に誰かいたら避けろよ、危ないぞー」

一応声をかけておいて。瞳を軽く閉じる。

鋭い魔力が刃のように放たれ、扉だけを完全に破壊した。

粉碎された扉は破片となつて飛び散る事もなく、砂のように崩れ落ちる。その扉の奥には。

涙を浮かべ、感激した様子の黒髪のメイド服の美少女。（但し、アフロ）

「え、美少女？ 泣いてる？ 何で？ いや、メイド服萌え。でもそれアフロはどうだろ？ じゃなくて、何処に驚けばいいんだ

俺は

「テレーゼは感激致しました。これ程見事に魔法を使いこなす方が姫様の夫になろうとは。感激です。感動です。全米が泣きます」「いや、いや、姫様の夫つてゆーか。てか全米つて何処よ。ああもう訳わかんねえ！」

「それはともかく謎の勇者様。朝食の準備が出来ました。どうぞいらっしゃって下さい」

次の日になつても事態はやつぱり変わらなかつた。ここはしつかりと話を聞いて、誤解も解いて、速やかにこの場を後にするしかないだろう。

彼はようやく覚悟を決める。

「てかさ、朝食は有難いんだけど、アレ、いいのか。爆発しまくっちゃつてるんだけど」

アフロの美少女も城の住人も、轟く爆発音に皆慣れきつた様子で足を止める者すらない。

ある意味脅威だった。アフロの美少女テレーゼは少し不思議そうな顔をして首を傾げて。

「朝食は和、洋、中華のどれがよろしいでしょうか？」

「ああ、朝は和食が……つて違うだろ。なんか違うだろ世界觀つての考え方よ。それにまず俺の質問に答えろよ。ああ、話の通じる人間と出会いたい……」
がっくりと肩を下ろして、しかし空腹の欲求には勝てず、しづしづと歩くアフロの美少女の後について歩く。すると、中庭付近にひとりの人影が見えた。

（ん……あれは？）

朝の光に煌く金の髪を靡かせている、高貴な身分の少女。白いドレスよりも白い肌に、宝玉のような蒼い瞳。まるで絵画から抜け出たかのような存在感。ふと、その様子に見惚れたが。

「待て待て待て待てーッ」

不意に優雅な仕種で立ち上がったその少女が、小首を傾げたまま
白い指先で空中に丸い円を描くのを見て、走り寄る。

「あら?」

待て、と言われて振り向いた少女が指先を彼に向ける。
その指先からは魔力が放たれていた。

青年は咄嗟に防御の魔法を張る。

弾き返すのは危険、と咄嗟に判断した為だ。

それくらい、その少女が無造作に作り出した魔力は強かつた。

第3話 王妃よ、世界を目指せ

「つてえ……。何で魔力だ、危ないだろ、あんな所でツ」怒鳴られた少女は不思議そうに首を傾げている。

「もしかして朝からの爆発もあんたか？ 室内で魔法使っちゃいけないって先生に教わらなかつたのか？」

「あの、失礼ですが貴方は……？」

金髪の美少女は、静かな声でそう尋ねて来た。

「うわー、やつてる事は非常識極まりないのに、初めてちゃんと聞かれたよ。ここまできてようやく。そうだよな、初対面の人には名乗るのが礼儀だよな。俺はロドウインって言つ旅の者。なんか知らないけど、いつの間にかこの城に連れてこられてた」

「ロドウイン様。わたくしはセレーティと申します。父のお客様でしたか。それは失礼を致しました」

優雅にお辞儀をするその様子は、先程の恐ろしい魔力さえ忘れそうになる程だつた。思わず挨拶を返してその場を立ち去りそうになる。

「いやいやいやいや、違つだろ。えーと……」

振り向くと、またアフロの美少女が感激した様子で涙を流している。そうか、この魔力を暴発している少女の傍にいるからアフロなのか。

そして、またこのパターンか……。

「ひ、姫様つつ。テレーズは、テレーズは感激致しました。姫様の魔力をあれ程簡単に！」

「姫様？ この魔力暴発の美少女がか？ そういうやさつき、父のお客様つて」

「はい、こちらはセレーティ姫で、ジゼコム。ロドウイン様」
そう言えば王妃に少し似ている気がした。

「んじや、こんな風に王宮を破壊しまくつたのもこの姫か。あんた、

「何でこんな事してんだ？」

「わたくし、王宮を破壊しているのではありません。魔法の練習をしているのです」

「魔法の練習？ そりや魔力は凄いみたいだが、まずは制御を覚えるのが先だろ。あなたの先生は？」

「先生……？ 何のことでしょうか。わたくしに先生などおりませんが」

深い溜息について、ロドウインは中庭に座り込んだ。
「つまり、誰からも教わらずに魔力を放つ方法を覚えて、練習して
るって事？」

「はい、そうですね」

「そうか。あー、そこアフロの美少女さん。悪いけど、王様に
会わせてくんないかなあ？」

「聞きたいんだけど、なんとなく事情は察せられたからちゃんと
答えて欲しいんだけど」

テレーズに連れられて、王の間へと移動する。

ロドウインがそう切り出すと、王と王妃は顔を見合させて、それ
から頷いた。

その傍らにはセレーティ姫もいる。

「要するに、姫の魔法暴発が迷惑なんだろ？ 毎日あんな風に魔力を
暴発されてたら、国民だつて迷惑な筈だ。だつたら何でそう言わない？ 止めさせればいいだろ？ 一国の姫を見ず知らずの他人
にやるつもりなのか？」

昨日の様子から言って、また曖昧に聞いてもはぐらかされるだけ。そう思ったロドウインはきつぱりとすっぱりと言い放つ。

けれど王と王妃の沈んだ表情と、セレーティの涙を溜めた瞳を見て。

「あ……？ そこでそういう反応？ 僕悪者なの？」

「……姫も我々も、充分わかっている。わかっていても止められない訳が、あるのだ……」

「訳があるのだ……じゃないでしょ？ 元はと言えば、あなたがつつ」

悲しげに俯いていた王妃が、突然立ち上がり王の頭を殴り倒した。

見事なパンチだった。

思わず共に世界を目指したくなるような。

「祖先に言霊術士がいたとか散々言つていたくせにッ。無意識にしか使えないくせによりによつて自分の娘に言霊呪縛を！」

「なるほど。言霊呪縛か。呪縛を掛けられたものは、本人が望まなくでもそれを成就させよつとするからな。で、その姫の夫云々は？ まさか祖先に夢占い師までいたんじゃないだろうな？」

「え、えへ」

「えへ、じゃねえだろ！ 中年男が許される言葉じゃねえぞそれは！ しかし、その姫の巨大な魔力に加えて言霊呪縛だろ？ 危介だ。まだここから脱出しよう！ でのが指令の脱出ゲームのがマシだつたかもな」

ロドワインは苛たしげに黒髪を搔き上げる。

「んで、どうするんだ。魔力の制御は独学では無理だ。ちゃんとしました先生について習つた方がいい。言霊呪縛は成就するか、掛けた相手が死ぬかしないと解除出来ないぞ」

王妃の瞳が怪しくきらりと光つたのを、王もロドワインも見逃さなかつた。いざとなつたらやる氣だ。いや、殺る氣だッ。お、女つてこええー……。

「グリオンを倒した勇者が、姫を救つてくれるつて言つてたもん」「言つてたもん、じゃねえよッ。中年男に許される言葉じゃねえつて言つただろ？ あんなうひを、誰でも倒せるつての！ それになんたら、俺が誰か知つてて言つてるのか？」「知らない」

「知りません」

「あの、知らないです」

「そんな所だけ仲良く即答かよ。こんなに苦労してんのに、俺まだ謎の青年のままだったんだな……」

ロドウインは遠い瞳をして窓の外を見る。のどかな美しい森が広がっていた。ああ、縁つて人の心を癒してくれるよなあ……。

第4話 王の中やんなに甘くはない

現実逃避は良くないよ、キリ。それに今名乗らないと、謎の青年のまま終わるぞお？」

「でも？ じゃねーつづーのつ。ああ、今誰よりもこの男がムカツク……。でも謎の青年のまま終わるものな……。てか名前出てるんなら謎じゃなくね？ でも出自、目的が不明ならやつぱり謎か？」

「もついいから名乗つちやいなよー」

「うるせえよ、この中年男。ああ、もついいや。謎の青年でいいです。とにかく姫にちやんとした魔法の先生つけてやりな。制御を覚えて魔法を使いこなせるようになればいいんだ、要するに。そしたら姫も破壊魔にならなくていいし、王も暗殺の危険（もちろん王妃からの）に怯えなくていいし、アフロにメイド服なんて不思議な格好も見なくてすむ。うん、解決。んで俺は目的地へと向かつて颯爽と去つていぐ。完。んじや俺はこれで。さよなら」「待つてえー」

立ち去るつとしたロドワインに、がしつと掴みかかるのは例の中年男。じゃなかつた、王。

「語尾を延ばすのはやめろっ。てかせめて王妃が姫だろ！ なんで男に縋られなきゃなんないんだよ」

「だつて夢がー。夢で、姫を救ってくれるのはグリオン倒した勇者だつて言つてたもん」

「そんなんただの夢だろ！ もつと現実的な解決方法があるのに何で夢を優先するんだよ！ 魔法の先生を呼べは解決じゃねえかよ！」

『姫はグリオンの勇者に救つてもらつー』

王の声が急にエコーが掛かつたかのように、部屋中に響き渡る。王妃は拳を握り締め、王は青ざめ……。そしてロドワインは脱力した。「信じられんねえ……。またやりやがった……」

王妃の見事な昇龍拳を見上げながら、両腕に美少女（但し、ひとりはアフロ）に縋りつかれ、溜息をつくしかない。

「えーと、言霊呪縛を解除するには本人殺すしかねえんだよな？」

……王妃さん、それで K？

「Jの際仕方ありません。国の為です」

「ぐく、国の為だなんてひどいつ。ひどいよお」

「いい大人が泣くなみつともない……」

深く深く溜息を付く。厄介だ。本当に心の底から厄介だ。

「あのせ、俺、目的があるのよ。だからこつまでもこの国に居る訳にはいかないんだけど」

「目的とは何ですか？ ロドワイン様」

腕に張り付いていたセレーティ姫が尋ねる。

「まあ、こんな所まで話を引っ張つてくるつもりはなかつたんだけど。俺はロドワイン・アルインダと申す。Jから更に西にある海沿いの国の出身だ」

「アルインダ国の……王家の者だと？　み、見えねえ……」

「あんたに言われたくないわッ。まあ、中年男に仔細を語りたくないから言わないが、先を急ぐんだ。知り合いの魔法師くらい紹介するからそれで勘弁してくれ。つて、なんで俺が頼まなきゃなんないんだ？　むしろ被害者だよな？」

きゅっと、抱きつかれた腕に力が込められたのがわかつた。見る

と、セレーティ姫が至近距離で見つめている。

「どちらまで、行かれるのですか……？」

「東の果てだよ。遙かに遠い。……俺は行かなきやならないんだ」

「どうして、そんな遠くへひとりで？」

「急に真面目にそんな事聞かれても困るが。えーと、聞いても楽し

い話じやないんだが」

セレーティは立ち上がる。そして王座にいた王と王妃を別室へと追

いやると、テレーズが照明を変えて、花を撒き散らした。

「これで Kですわ、ロドワイン様」

「いや、やつあからさまに雰囲気出されても困るんだが」

「…音楽、入れます？」

「入れんといわっつ」

さあお話を聞かせて下さいと言わんばかりの様子で両脇に座った

一人の美少女の姿に、今日何度もかわらない溜息を付く。

「話さないと解放してくれそうにないな。時間がないから簡潔に言うが、俺の国では王家に男子が三人生まれた場合、絶対に守らなくてはならないという伝統があつてだな。それが、王位は必ず長男が継ぎ、次男は神官になり、三男は国を追放するっていう内容で。男子が三人もいると王位継承を争つて国が乱れるからって事らしい。んで、俺はその三男つて訳。俺は王位を継いだ兄の命令で、東の果てにある魔導天の塔へ行かなきやならないんだ」

「そこでどうするんです？」

「さあな。まあ大人しくしていれば普通の生活くらいは出来るだろうし、魔法でも学びながら暮らすかな」

「魔法……！」

急にキラキラと瞳を輝かせるセレーネ姫。

「うわ、何か嫌な予感が……」

「わたくしも参ります！」

嫌な予感つていうのは大抵当たるのは何故だろ？ これからこの姫を説得する労力を考えて、ロドウインは肩を落とす。そして、この一言で納得してくれないかな、と僅かな、ほんの僅かな望みを掛けた。

「却下」

「まあ、どうしてでしょう？」

やせっぱつ世の中はそんなに甘くない。

第5話 諒めが肝心だ

「あんた、この国の姫だろ？。そんなに簡単に国を出ていいのか。
見た所他に兄弟もいない様子だし、跡継ぎなんだろ？」

「確かにわたくしはこの国の王位継承者ですが、父も母も反対しないと思います。むしろわたくしが魔法制御を覚えて帰国した方が国の為かだと思います」

「た、確かに……。って、俺が納得させられてビリする。とにかく却下」

もう話は終わり。

そう言つたのように立ち上がり、ロドワインは振り向いた。

「まあ、そういう事で。先を急ぐし俺は行くよ」

「駄目です」

「いや、駄目って言われてもな…。却下で」

「駄目です」

「却下……ってこれじゃどうもねえな。仕方ない、何が駄目

で何が却下か冷静に話し合おう」

「わかりました。テレーズ、お茶をお願い

「かしこまりました」

アフロの美少女は完璧なお辞儀をして立ち去つていった。ロドワインは再び溜息を付く。

(溜息を付くと幸せって逃げるんだっけ……)

ほんやりとそんな事を考えながら。だとしたら、今日一日で快速どこのか特急の勢いで幸せとやらは遠ざかっているのだろう。

「で、まず俺の言い分な。お姫様あなたに旅なんて無理だし、他国の世継ぎの姫を危険に晒すのもマズイだろ。以上

「大丈夫です。旅の経験はないですが、出来ます」

「……なんで俺？ 魔法教えられるヤツなんていくらでもいるし、しかもあなたは姫だし、喜んで教えてくれるヤツなんて山程いるぞ

？」

「仕方ないです。そういう風に決まつてしましましたから」

「く……。これが言靈呪縛か。何が何でも俺を関わらせるつもりか」

「……わたくしの魔法を止めて下さいました」

不意に、セレーネティイが小さく微笑んだ。それは優しく、そして少し悲しげで。

「わたくしにもわかつていました。わたくしの存在そのものが、迷惑になつていてる。でも、わかつても止められなかつたのです。それを、ロドウイン様は止めて下さつた。これ以上の理由を、わたくしは知りません」

「あんたのせいじゃないよ。他の者が何言つたって、言靈呪縛つてのはそういうモンなんだ」

いつのまにか、テレーズがお茶を持つて立つていた。

完璧なメイド服のアフロの美少女は、静かにお茶を淹れながら。「どうか、姫様を連れていつて下さらないでしうか……。私で出来る事ならば何でもお手伝い致します。今まで居たのです。姫様に魔法を教えて下さるうとする方や、王様の言靈呪縛を解こうとして下さつた方が。……けれど、姫様の魔力を止める事は出来ませんでした」

「なるほど。確かにあの魔力は凄かつたな。制御を覚えれば、稀有な魔導師になれるかもしね。それに、これも呪縛された結果だろうし、せめて呪縛を解除出来る人間の所まで連れて行くつてのは仕方ないかもしね……」

テレーズの淹れてくれたお茶を一口飲んで覚悟を決める。

「よし、仕方ない。取り敢えず呪縛解除出来る人間を探す。悪いが、俺も急いでいる。なるべく早く出発出来ると有難い」

「ならば今すぐにでも出立いたしましよう」

仮にも一国の姫である。準備には随分と時間がかかるであろうと思っていたロドウインは、予想外の返事に素直に驚く。

「いいのか？ 準備とか色々あるんじやないのか？」

「わたくし……ずっと、王宮を出る事を夢見ていたのです。やっと外へ出れるのです」

言靈の呪縛に縛られていた姫は。

その言葉通り夢見がちな瞳でそう告げる。

けれど、自分についていきたいと切望するのは、別の呪縛にまた囚われているだけではないのだろうか。言靈に翻弄されている哀れな王女。国を出なければならなかつた自分と、國を出たいと切望する王女との旅は、果たして幸運となるのか不運と終わるのか。

「足が痛いです……」

王と王妃に見送られ。人目を避けるように出立してから、五分。そう、まだ五分。

「あまりにもお約束な反応に何も言ひ気がなくなるな……。よし、先を急げ!」

「ロドワイン様はどうしてそんなに急がれるのですか？」

アフロのメイド服の美少女が、（旅をするのにまだメイド服つのはどうだろ?）姫の荷物を大量に担いだまま言つ。

「そうですね。せつかくお城から出れたのですから、もつとまつたりと、観光名所など巡りながら行かれたらよろしいのでは」

「悪いが、そんな余裕はないんだ。こっちにも事情があつてね。とにかく荷物は俺が持つから急ぐぞ」

テレーズから荷物を奪い取り、歩き出す。さすがに女に大量の荷物を持たせたまま身軽では歩けない。しかし傍目にはどう見てもお嬢様、侍女、下男だ。

「いや、下男つてのはいくらなんでも自分を卑下しすぎだろ。せめてボディガード。そう、俺はボディガードだ」

そう胸を張るが、その腕は大量の荷物の重みで震えている。

「ロドワイン様、私がお持ちしましょうか?」

「はつはつはつ。何だこれくらい。全然平気だ」

キメ顔でそう言ってみるが、ロドワインは魔導師だった。当然身体など男の嗜み程度しか鍛えていない。

「取り敢えず急ぐぞ。このままだと森の中で夜になっちゃまつ。野宿は危険だし、さつさと町へ辿り着かないとな」

セレーティ姫はさすがに多少は動きやすい服装をしているが、町娘のように軽い服装でもない。しずしずと歩く姫の歩調に合わせていると、夜どころか明日の朝になつても町にはたどり着けないような気がした。

「……無理だろーなー」

しばらく歩いた後。

地図を広げ、現在地と町までの距離を測つたロドワインは、早々に夜までに町に辿り着くのを諦めた。人間、諦めが肝心だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4829m/>

恋する爆弾王女

2011年1月22日11時11分発行